

# 黒と白、二つの王国の出会い

おやさと研究所准教授  
森 洋明 Yomei MORI

80年代、コンゴ（共和国）の首都ブラザビルの住宅街を歩いていると、子どもが近寄ってきて手をさわっていくことがしばしばあった。聞けば、肌に何か色でも塗っているのではないかと確かめているとのことだった。近年、都市部ではこのようなことはないが、それでも地方の村に行けば時々遭遇する。60年代に来日したコンゴ人から、これと同じような経験を日本でしたと聞いたことがある。日本で最初にこの種の経験をしたのは、イエズス会の宣教師ヴァリニャーノが連れてきた黒人の召使いではないだろうか。初めて彼を見た織田信長は肌の黒さから墨でも塗っているのだろうと思い、体を洗わせたというエピソードが残っている。その後、彼は信長から武士として取り立てられ、「弥助」と名づけられる。肌の色の違いからくるこのようなことは、コンゴ王国の領域に初めて来たポルトガル人も経験した。

ポルトガル船が大西洋のコンゴ川の河口に到達したのは1482年のこと。いわゆる大航海時代が始まったころである。初めて見た肌の色の違う人に対して、現地の黒人たちはその白い肌に唾をつけてこすってみた。そして色がまったく落ちないことに大いに驚いたのだった。

船にはキリスト教徒となったギニア湾沿岸出身の黒人が通訳として同行していたが、コンゴ川河口付近で出会った黒人は、姿は似ていても言葉が違っていた。それでも、そこがコンゴ王国の領地内であり、川の奥には王国の首都があるということが分かった。そこで船長は、同行させていた黒人に国王が喜びそうな品々を持たせ、河口にいた現地人に案内を依頼し、王国の都へ使者として向かわせた。船はインド洋へぬける航海ルートを探すべく一旦河口を離れるが、帰路の途中で戻ったとき、送り出した黒人の姿もコンゴ王国からの使者もいなかった。船長は捕虜として付近の黒人4人を連行し、船はポルトガルへ戻っていった。



コンゴ王国の支配地域

ちなみにコンゴ川はザイル川とも呼ばれている。それは、初めてコンゴと接触したポルトガル人が現地人の「ンゼレ」「ンザンディ」（「すべてを飲み込む川」の意味）というキコンゴ語の発音を聞き取れず、そこから転じて、ザイルになったと言われている。コンゴ王国の一部であったコンゴ民主共和国は、モブツ大統領の時代にこの「ザイル」を国名（1971～1997年）にしていた。

このコンゴ川の発見にポルトガル国王は大いに興味を示し、捕虜として連れてこられた4人の黒人を奴隷にすることなく、むしろ教育を施し、言葉を覚えさせ、キリスト教に改宗させた。さらには、宮廷内に部屋まであてがった。当時としては、考えられない待遇だった。

ポルトガル船が再びコンゴ川の河口に現れるのは、それから3年後の1485年のこと。捕虜として連行された4人の黒人にとっては、3年ぶりの祖国への帰還だった。ヨーロッパ風の貴族の衣装を身にまとった4人は、ポルトガル国王の親書とコンゴ国王への土産の品を携えて都へと向かった。親書には、両王国の対等な関係とコンゴ国内でのキリスト教の布教を認めるようにと書かれてあった。1回目と同じように、船がさらに南の航路探索から河口に戻ってきたとき、今度は3年前に使者としてコンゴ王国に遣わされた黒人たちが待っていた。そして彼らはコンゴ王国からの返礼の品を持っていた。

3度目のコンゴ王国への出航はその2年後の1487年。ポルトガルが南アフリカの喜望峰に到達する1年前のことだった。このときの帰路、コンゴ王からの使者がポルトガルへ同行した。そのなかには宮廷貴族の子息たちが含まれていた。彼らは言葉を覚え、キリスト教に改宗。また、ポルトガル王の格別の待遇もあり、ヨーロッパの諸学問を積極的に学んでいった。

ポルトガル王国がアフリカの一王国に対して好意的な姿勢であったのは、未知の大陸へ進出するための足がかりとし、そこで発見されるであろう富に対する期待があったようである。また、コンゴ王国が、当時としてはかなり制度の整った王国であったということも影響していたかもしれない。実際、その規模や統治の状況から、ヨーロッパの王国と匹敵するような社会システムがあったと言われている。貴族や家来、奴隷などから構成される宮廷があり、王自身は聖なるものとして崇められていた。15世紀頃は2～3百万人に達する人口を抱え、現在のアンゴラ、コンゴ民主共和国にコンゴ共和国、さらにはガボンの一部にまたがる領地を6つの地方に分けて支配下に置いていた。

そのコンゴ王国も、ポルトガルの進んだ文明とキリスト教を導入することによって、統治をより強固にしようとする意図があったようだ。1490年にはコンゴ国王からの要請を受けて、伝道師や石工、大工などさまざまな技術者が、祭具や装飾品、建材や資材などを積み、3艘のポルトガル船でコンゴへ向かった。そしてこのとき遂に、ポルトガルの代表がコンゴ国王と直接に面会し、対等な国交の樹立を宣言する。ヨーロッパとアフリカの二つの王国のこのような出会いは、労働力として大量の黒人が捕らえられ、アメリカ大陸に輸出される以前の出来事だった。

コンゴ川河口で黒人が白い腕に唾をかけてこすったことも、ブラザビルの住宅街で子どもたちが私の手の色を確かめるために触れてくることも、あるいは信長が黒人の体を洗わせたことも、初めて見る肌の色の違いに対する自然なリアクションだと思う。もし肌の色に優劣を感じていたとすれば、そもそも触れることもなかっただろうし、「弥助」と名づけられることもなかっただろう。ただ、人類の歴史は、白と黒にあえて優劣の違いを植え付ける方向へと進んでいくのであった。

[参考文献]

ピーター・フォーバス『コンゴ河—その発見、探検、開発の物語—』田中昌太郎訳、草思社、1989年。  
Geroges Balandier, *AU ROYAUME DE KONGO DU XVIe AU XVIIIe SIÈCLE*, HACHETTE, 1965.  
Raphaël BATSIKAMA, *L'ANCIEN ROYAUME DU CONGO ET LES BAKONGO*, L'Harmattan, 1999.